

瀬戸内海道

平成24年

瀬戸内海に2つの海道がある。

尾道から今治に至る「しまなみ海道」、安芸灘に浮かぶ瀬戸内の島々をつなぎ、本州に誘う「とびしま海道」である。陽光あふれる、これらの海道を走ってみたいとおもった。旅走、走り旅である。

10月4日（木）

定時に仕事を終え、帰宅後、明日、明後日の最小限の荷をリュックにつめ、ランニング姿のまま柳ヶ浦駅20:27の特急ソニックで博多へ。すでに臨戦態勢である。博多交通センターから22:35夜行バスで一路広島へ。

10月5日（金）

6:02定刻に広島バスセンター着。今日はJR広島駅から三原に移動し、三原からフェリーで生口島に渡り、その島から今治まで走る予定である。インターネットで事前に調べ、ほぼ完璧なスケジュールを作っている。JR広島駅まで歩いて行こうとビルのガードマンに道を尋ねると、「市電で行かんと無理じゃけ」という。市電で移動。20分くらいで到着。広島駅は朝の喧騒が始まろうとしている。足早に新幹線に急ぐ人。通学生。ビジネスに勉強に忙しそうである。その中で、ランニングスタイルにリュックを背にした我は、どのように写っているのだろうか。駅売店でおにぎりとお茶を買う。改札口に行くと、6:59発三原行きの電光掲示板。予定では7:02の岡山行であるが、少しでも早い方が良くかと安易な気持ちで乗車。通勤サラリーマン、通学生で4両編成の車輛の座席はすべて満たされている。立ったままの人もある。途中の駅からも次々と乗り込んできて混雑してきた。広島を出て暫くすると、瀬戸内の海が見えてきた。突然、後ろ頭を叩かれた如く閃いた。いや、暗澹な気持ちになった。この電車は、呉線を走っている。7:02発は山陽本線だったはずだ。呉線は山陽本線に比べかなりの大回りになる。廻ってきた車掌に三原駅到着時間を聞くと10:00だと事務的に答えてくれた。スケジュールを写した手帳を取り出す。7:02の電車で行くと、三原駅に8:18着。フェリーが8:35発で生口島に9:02着。次のフェリーが11:05発、生口島に11:28着。なんと2時間20分強の時間遅れである。自分の迂闊さが腹立たしいが、どうしようもないと思った。折角の旅だ。楽しく時間を使わないと勿体ない。幸い呉線は瀬戸内の海岸線を走っている。車窓の風景は最高である。島が造物の神様の忘れ物のように点在している。島と島の間をゆっくりと舟が行き来している。造船所も時々車窓の景色に加わる。乗客も呉、広島で通勤通学客は殆ど降りてしまった。そこからは正にローカル線と化した。たびたび、離合待ち合わせで田舎駅に停まる。べた風の瀬戸内海がどんよりした日に乗せ、ゆっくりと宛もなく流れている。このハプニングは神様の贈り物かも知れない。この時間が旅心をふくらませる。



10:00 定刻通り三原着。想像以上に三原市は大きな街である。三菱重工、帝人が進出している。駅には城址の案内、秋祭りの案内等活気を感じる。駅前の通りを海に向かい真っ直ぐに10分ほど歩くとフェリー乗り場に着く。誰もいないフェリー待合室でなにげなく時刻表に目をやると、10:30発のフェリーがある。インターネットで調べた時は気がつかなかった便である。あと20分で出航する。早速、日焼け

止めを塗り半袖Tシャツに着替えランモード体制を整える。

フェリーは定刻通り出航。乗客7人。乗客30人も乗れば満員の小さな船である。もちろん車の航送はない。三菱重工の工場群をあとにしながら三原港を遠くする。海風が肌寒さを感じさせる。30分で生口島に上陸。リュックのベルトを締め直す。体から湧いてくる、このわくわく感がいい。今日一日どんな一日になるのだろうか。至福である。

まず生口島といえば、あの日本画の巨匠平山郁夫の故郷である。進行方向と逆になるが、外側から美術館の建物だけは見ようと思う。フェリーを降りる時、地元の人らしいお年寄りの客に美術館の方角を訪ねる。そんな人は聞くまでもない、というふうにぞんざいな言い方で、出て左の方へ行けばいいと言う。早速一步を踏み出す。海岸の防波堤に沿い走り始めると、どうも違和感がある。だんだん道が細くなってきた。ステテコにタオルで鉢巻きをした漁師らしきおじさんに確認すると、道筋が違っていた。出発場所に戻り、大通りを行く。12年前、福山城から今治城までの100キロマラソンに出場し、しまなに海道は走破している。大通りを走っていると、マラソンの苦渋の記憶が甦ってきた。純和風のしっとりとした落ち着いたある美術館はなぜか鮮明に覚えている。その懐かしい建物が見えてきた。カメラに納め、いよいよロングランモードに入る。1キロほど行くと海岸線に出る。春の旅走の日向路の太平洋と異なり、穏やかな海面だ。漁船か、島から島への連絡船か、ゆっくりと航を引きながら島影へと消えていく。それぞれの島にそれぞれの生活がある。正に秋の潮である。あの平山邦夫の繊細な絵心を育てた海であり、風であり、島である。生口島は島ごと美術館とうたっている。海の中に三角形をモチーフにした海中彫刻が岩の上に建っている。二つの白い三角形の帆が風にまかせて、くるくると廻っている。



サイクリングロードと歩道を兼ねた道は、グリーンのパイントが風化されつつあるが、十分に広い。ここも多分12年前に走ったはずだが、印象に残っていない。前方に歩道から釣糸を潮に垂らしている人がいる。かなりのご年配の漁師上がりと思われる人だ。潮に日焼けした顔の皺が深々と刻まれている。船に乗れなくなれば、岡から漁をする・・・海の男の業なのかも知れな

いと思いつつ歩を進める。暫く行くとバケツ片手に釣り竿を担いで、老婆が釣り場を探しているのに遭遇した。島の人の生活のしづとさを垣間見るようである。遅れを取り戻すべく淡々と歩を進める。サンセットビーチと名付けられた海岸通りに出た。ここにも彫刻があるらしい。レストラン兼喫茶店が、夏の繁盛の忘れ物ように取り残されている。時間の遅れが道をせかせる。ビーチに寄らずに行く。後日、寄れば良かったと後悔した。街路樹に柑橘類の木が植えてある。よく見るとなんとレモンの木である。国内レモン発祥の地と言う碑が立っていた。たわわに実を付けていたが、まだ青々としている。前方に多田羅大橋がかすかに見えてきた。近づくとつれ、大白鳥が羽を広げたような巨大な橋である。橋を支える巨大な2本の塔から、橋を吊るようにワイヤーが何本も左右対称に張られている。幾何学的美しさである。歩を進めると、国内レモン発祥の地という新しい石碑が建っている。碑によると明治より生産しており、収穫量は日本一だったとある。しかし、レモンの輸入自由化により、外国から安価なレモンが入ってきて壊滅的な打撃を受けたと記されている。なにやら昨今のTPP問題における農業はかくなるべしと言うことか。現在は輸入レモンの農薬問題により、復活を遂げたとあり、めでたしである。碑を後にして少し行くと、橋の1キロ位手前から、道路から橋へ上がる歩行者とサイクリング専用の取り付け道路に入る。右に左にみかん畑、レモン畑を見



ながら蛇行道を黙々と走り、高度を稼いでいく。みかんは色づき始めている。レモンは見るだけで酸っぱさを感じる青さである。時刻は正午を廻っている。汗が額を濡らす。橋に辿り着く。サイクリング用の料金所が現れる。自転車100円、歩行者無料と書かれている。無人である。料金所を通過する時、「自転車の方は料金をお支払いください。百円です。」と音声放送が流れる。センサーが設置されている。一瞬、虚をつかれた感じになる。右側の自動車道は高速道になっている。凄いスピードで追い抜き去っていく。穏やかな潮の流れがきらきらと太陽に映えている。橋を吊る鉄柱が秋天に突き刺すように伸びている。見上げていると、首が痛くなった。建築技術の素晴らしさに、畏敬の念さえ湧いてきた。全長1.5キロ。橋の真ん中で外国人夫婦とおぼしきカップルが、ウォークで渡っていた。橋を渡り終えると、一般道へ自転車と歩行者は降りなければならない。らせん状になった坂を一気に下る。大三島である。降りるとすぐ大きな道の駅が待っていた。観光バス、多くの自家用車が停まっている。立ち寄りたい気持ち抑えて、走りに専念する。大三島には大山祇神社があり、当初は訪ねる予定であったが時間の関係で諦める。暑さを感じるようになったが、海岸道に人家もあまりなく、自販機が全く見当たらない。腹も空いてきた。次の大三島橋までの距離表示があらわれてきた。橋が見えてきた。アーチ型の白い橋であ

る。一旦、橋の下を潜って回り込み、取り付け道路を登る。橋に上がると、自転車道、歩道の広いことに戸惑いを感じる。5メートルくらいはあるだろうか。橋は328メートルと表示されている。島と島の感覚が狭いせいか、瀬の流れが速く感じられる。渡り終わると、一般道まで長い取り付け道路をグルグルと走り下る。

伯方島に入る。道なりに大きな造船所が見えてきた。造船所は生口島でも大きな造船所があった。クレーンというのだろうか、何本も空に突き上げ、タンカーだろう、進水を待つばかりに工事を進めている。島の人々の大きな雇用を生み出していることだろう。歩を進めていくと、道の駅がある。1時をだいぶ過ぎた。昼飯にしようと思った。近づくと、幟を立てられテントが張られている。幟には「スリーデイ・ウオーク」と書かれている。聞いてみると、今日、明日、明後日で3日間に分けて、しまなみ海道を踏破しようという催しらしい。今日のゴールはこの道の駅らしい。次々とゴールしてくる。テントの中では、完歩者にお茶、ジュースの接待が施されている。まずは飯と、道の駅の食堂に入る。駅の中の隅に10人ほどが座れば満席となるテーブルがある。伯方は塩で有名である。メニューの中から伯方塩ラーメンと、海鮮丼のどちらにするか少し迷う。体は塩ラーメンを要求しているが、敢えて瀬戸内の新鮮な魚をふんだんに散りばめたところを期待して、海鮮丼を注文する。1200円は期待を裏切らないと思った。が、魚はスーパーで買って来たような、淋しいものだった。旅に来て一食損をした気分になる。お土産コーナーを見て回る。塩以外に目ぼしいものはない。それにしても塩の高いこと。天然、ミネラル豊富と購買意欲を少しかきたてるが、荷物を増やすことは走りが重くなる。買わずに店を出る。広場ではウオークの完歩者が続々とゴールしてくる。みんなやり遂げたい顔をしている。老若男女、いや老老男女にたまに若い女性が混じっている。みんな揃いのタオルを首に巻いたり、腰に下げている。参加者の目印か。走り始めると、だらだらと三々五々となりゴールを目指すグループと擦れ違う。「こんにちは」「ご苦労さま」と声を掛けたり、掛けられたりの連続だ。相手は、私だけに声を掛ければいいが、こちらは擦れ違うたびに挨拶をする。時々、声を掛けても無言で行き違うひともいる。しばらく目礼でやり過ごしていたが、いま一つ楽しくない。旅を楽しむためには、こちらから元気に声を掛けるほうが楽である。そうしようと決めた。一瞬のすれ違いだけでも、これもひとつの一期一会の出会いかもしれないなどと思った。伯方大島大橋の秋風に吹かれながら、次々と擦れ違っていく。橋の上から、さっき立ち寄った道の駅が白い砂浜の先に小さく見える。その奥に造船所のタンカーが進水を待つばかりに、舳先がドックからはみ出すように見えている。橋の上から



見る景色は、島影が重なり、穏やかな潮が、時たま軽い反抗を示すがように、小さな渦を作っては消えて流れていく。漁り舟、運送船など秋の日を楽しんでいるように航行していく。ウオークのグループが記念撮影をしている。全員の写真のシャッターを押してほしいと頼まれ、交換に私の撮影をお願いした。この橋は、吊り橋形式の白い優美な曲線が女性的な感じを出している。1キロ強の全長だ。渡り終えると、長い取り付き道路を一般道へと下っていく。大島に入る。この島は、今日の行程の中で、次の橋まで陸上を一番長く走る島である。相変わらず、ウオークの人達と擦れ違う。挨拶を返してくれれば元気がでる。というか、出すぎた。ちょっとオーバーペースになった。あるグループの人達から、ハイタッチを求められてきた。はい、はい、はいとハイタッチ。テンションが挙がる。何だろう、いいなと思う。

ずっと海に見える海岸線にサイクリング道はあったのだが、しばらく行くと、道は直進と右折に別れている。サイクリング道は島の内陸部へと右に曲がっている。海岸線を直進すると、あの村上水軍の記念館があるようになっている。事前に取り寄せた、しまなみ海道サイクリングマップに場所が記載されている。織田、豊臣時代に、さらにその前の時代に瀬戸内海を縦横無尽に航行し、倭寇にもなったという村上水軍。今、速い瀬の流れ、多くの島々を見ていると、その船姿が彷彿としてくる気がした。瀬戸内を走っている今、ますます興をそそられる。しかし、その方角の道は狭そうだ。地図を見ると、かなりの大回りになる。スタートのミスが時間をせかせる。結局、安全と時間を考え、サイクリングマップに従うようにした。

疲労を感じてきた足には、嫌悪感さえ感じるだらだら坂が続く。前方から、旗を担いだ10人前後のウオークのグループが近づいてくる。最後尾のウオークの人達であろう。先頭とはどれくらいの違いができたのだろうか。「一緒に歩こう」とおじいさんに軽く弄られる。笑顔を返して別れる。アップダウンの繰り返しと、変哲もない田舎風景に気持ちが萎えそう。12年前、疲労のため、ここで気持ちが折れそうになり、ゴール出来るだろうかと泣きたいくらいに不安になったことを思い出した。この島に入り、2時間近く走っただろうか。ようやく海が見えてきた。来島海峡である。海を見るとほっとする。長い人間の歴史の遺伝子の中に、海に対する親和性が折り込まれているのだろう。人間のルーツは海洋にあるのかもしれない。長い坂を下ると、三叉路を右に進む。大きな道の駅がある。時刻は5時を少し廻っている。店仕舞いに忙しそうである。左手の方にしまなみ海道最後の橋、来島大橋が見えてきた。しまなみ海道で最長の橋で、4キロ強を誇る。一般道を一旦橋の下を潜った先に、橋への取り付き道に上がっていく。カタツムリの殻のように周りながら上っていく。前方からランナーが勢いよく駆け下ってくる。装備から見て地元のランナーだろう。どの橋もそうだったが、その高さに驚く。この橋の



下は、別府・神戸間のサンフラワー船が通過する海峡だ。この来島海峡の瀬が、瀬戸内で一番激しいと聞いたような気がする。空の雲に夕色が兆している。うっすらと茜色に染まり始めている。海にもわずかにその色が写っている。遠くの島、それを囲む海。染め始めた夕色。感傷的な気分を感じる。今日の旅心の集大成がここにある。“瀬戸は日暮れて・夕波小波・・・”まさしく、阿久悠の世界がここにある。海風に吹かれながら、声を出して歌う。学生時代仲のよかったN君の結婚式で、これも仲のよかったH君がこの歌を、グリークラブ仕込みのテノールで歌ったことを思い出す。まだ、24、5才の頃だ。若かった。良いことも、悪いことも共に一緒だった。そのH君、人生の紆余曲折の中で、みんなと音信不通になってしまった。どうしているのだろうか。昔を思うと涙が出そうになる。海に向かって「H野」と叫んで見たかったが、前よりサイクリングの人が来てやめた。橋の下をタンカー、漁船、モーターボートが時折行き来する。小さな島が見える。10数戸の家並が小さな湾に寄り添っている。その島に暮しの灯がともる。今治が近いせいか、散歩の夫婦らしき人、デートのカップルが海峡の夕景色に擦れ違ふ、また追い越す。橋を渡ると、一般道まではきれいな螺旋状の取り付き道を下る。渡ってきた海を見ると、灯台が灯っていた。ここは糸山公園とある。展望所、貸しサイクルセンタの案内が出ている。国道317号に向け今治郊外を走る。国道317号を真っ直ぐ進めば今夜のホテルに着く予定である。段々と暗さの増してきた道を淡々と進む。街中まで5キロ弱と思うが、遠く感じる。道にあのウオークの“スリーデイ・ウオーク”の旗が目につく。7時前にホテル着。ロビーはウオークの人達で小混雑。コインランドリの順番がなかなか取れずに苦労する。缶ビールと缶チューハイ一本で爆睡。夜行バスの寝不足と、疲労で。

10月6日（土）

昨夜、コンビニで買っていたおにぎり2個、野菜ジュース、チオビタを摂取、6時40分ホテルチェックアウト。今治港まで歩いていく。10分。今日は、フェリーで岡村島に上陸し、安芸灘とびしま海道と名付けられたサイクリングロードを、呉まで走る予定である。フェリーは7:20発。今治からは、瀬戸内の島々に船が出ているのだろう、栈橋が第3まである。数名が既に栈橋で折り返しのフェリーを待っている。今日も、瀬戸内は風いている。フェリーが到着。島からの人が10人ばかり降りてきた。通勤者であろうか。15人ほどが乗り込む。釣り人らしき人。新聞の束を抱えた人。船で新聞配りをするのだろう。勤めに行く人。島にどんな会社があるのだろう。一人若い、30歳前半か、若い青年（男の子という方があっている）が、サドルが見える大きなバッグを肩に乗り込んできた。組み立て自転車とびしま海道を走るのだろうか。高価そうなデジカメで港風景を撮っている。

フェリーに乗り込む。20人も乗れば満員である。フェリーの中が油で匂う。船員は3名。2名が機関員、1名が車掌みたいな役割。全員60前後の歳格好。しどけなく、制服みたいなものを羽織っている。その船員の1人に、女性の乗客が「××ちゃん、なんか匂うな」。

知り合いなのだろう。「んよ。さっきから匂んじゃ。オイル漏れかもしれん」。私の座っている席の横の通路の蓋を開け、船室に潜って行った。フェリーのエンジン音が気のせい、不整脈のように聞こえてきた。晴れぬ顔をして出てきた船員が、他の船員となにやら数語言葉を交わし、エンジンをフル回転にした。なにも説明がない。不安がよぎる。しかし、地元の人と思われる乗客は、毫も動じていない。都会人なら、船員に詰め寄る人もいよう。瀬戸内の人のおおらかなこと。フェリーは波止場から出て、朝の瀬戸内をエンジン音けたたましく波を分けていく。空は曇りがちである。雲の切れ間から、時々朝日が差し込んでくる。海に鈍い光の帯ができる。後ろに5人ほどのデッキがある。先程の青年が時々シャッターを押している。昨日渡った来島大橋が見えてきた。これからその下を潜っていく。海上から見ると、その長さ、大きさ、高さ、美しさに昨日とは違った感慨を感じる。大島側は遠く霞むがごとくである。途中の島に寄るごとに、釣り人が少しずつ降りていく。栈橋に来ている人に、島ごとに新聞の束を手渡す人。島には既に釣り人が釣糸を垂れている。三つの島に寄り、8:20岡村島に到着。フェリーの故障がなくほっとする。栈橋の前に古びた漁協の2階建ての小さなビル。2、30戸の漁家。軽く屈伸をして今日のランに備える。あの自転車の青年が降りてきた。同じ匂いを感じる。どちらからともなく、話しかける。静岡から来たという。昨日は、しまなみ海道を走り、今日はとびしま海道を呉までという。全く、自分のコースと同じである。一人旅のあれこれを取り止めもなく交わし、互いにエールを交換し、先発する。走り始めると、道なりの防波堤で中年の女の人が3人程井戸端会議中である。私を見つけると、興味津々の視線を遠慮なく投げかけてくる。「日本一周？」・・・てなわけなのでしょう・・・「ここからとびしま海道を呉まで」私。「いやー、たまげた！その足で〜！」とおばさん。「あんた馬鹿じゃね〜か。どの世界に足で走らんと、



手で走る馬鹿が居るの！」隣のおばさん。間髪入れずにこの突っ込み。海の女は気っ風がいい。顔は黒い。声は大きい。海を知り尽くした胆の太ささえ感じさせた。寝起きのくせ毛に、男物と思われる、トレーナーにジャージ。これだけ堂々としていると様になっている。岡村島を右回りに岡村大橋を目指す。島は橋伝いに巡るため、島の北側か、南側のどちらかだけを走ることになる。自転車青年が追いついてきた。10

年来の知己みたいな気がする。走りながら、今日の島の走行コースを確認すると、ほぼ両者同一だ。「楽しんで」と再度別れる。とびしま海道も、しまなみ海道ほどではないが、橋の高さは結構なものだ。どの橋も両端はアップ、ダウンがある。今日も風だ。遠く自転車青年が橋を渡っていくのが見える。一瞬の出会いだった。いい旅にしろよと、念ずる。岡村大橋を渡り始めると、橋の真ん中に、愛媛と広島県の境の線が、県名とともに書かれている。広島県に突入。小さな無人島に掛かった中の瀬戸大橋、平羅橋を渡り、大崎下島に

入る。先程の岡村島よりはるかに大きな島である。やや距離の短い、島の北側のコースを選択する。磯には釣り客が所々見られる。広島、岡山、山口ナンバーなどいろいろな県から来ているようだ。サイクリングの団体と擦れ違う。競技用の出で立ちで、ヘルメット、ゴーグル、カラフルなウェアが決まっている。シャーという軽快な音を立てて擦れ違っていく。挨拶も切れがある。鄙びた海の風景が続く。コンビニなど見当たらない。釣り人は多い。サイクリングの団体、個人と時々行き交う。小型トラックが波止場に停まっている。行商らしい。果物からトイレトペーパーまで、何でも売っている。抜け目のなさそうなおばさんが、客の品定めを見つめている。リンゴを買いたいと思うが、ナイフを持ってないというので、諦めた。走りながら、歯から血が出るなんて様にならない。サイクリングの連中が、バナナを房ごと買い（房でしか売ってない）、仲間で分けている。なにか果物が食べたいと思ったが、結局諦める。事前に調べた観光情報に拠ると、この島は南側の方がひらけているようだ。しかし、北側の方が走行距離が短い。今日は、あわよくば広島市内まで走れたらなど思っているのに、どうしても短い方を選んでしまう。ホテルは広島の駅前に予約してある。呉・広島間を電車移動すると汗臭いまま乗るのもどうかという気がするものだから・・・。

次の島が見えてきた。豊島である。豊浜大橋も見えてきた。幼少の頃習った、綾取りの“はしご”に似た形をしている。橋を渡り終わると、新道と旧道に別れる。新道は、とびしま海道を訪れる車の渋滞を緩和するために、山（島の高地）のなかに開設されたのだろう。新道を行きかかるが、登りが続くので海岸に沿った旧道におりる。ここも北側のコースを選択する。これには呉市支所もあり、先程の島より賑わっている。船泊には多くの漁船が繋がれている。デイサービスに行くと思われるご老人達が、ベンチに腰掛け所在無く海を眺めている。走っていると、後ろから声を掛けられる。なんと自転車青年だ。「また会ったね」私。「かなり進んでいますね」彼。一期一会も3回目だ。会うたびに彼の好人物が伝わってくる。暫く今までの旅の話や、これからの予定やらを話ながら、伴走してくれる。前の島で、御手洗という、江戸時代に船の風待ち、潮待ちで栄えた町を散策してきたと言う。名残惜しいが、お互いに安全に行こうと先に行って貰う。

海風に吹かれながら、歩を進めると次の豊島大橋が見えてきた。次の島は上蒲刈島である。とびしま海道では最大の面積を持つ。橋を渡り終わると、新道に進む。島のリアス式海岸を走るより、安全と距離の節約を考えた。トンネルの入口まで登りで、後はだらだら坂で走るのには気分いい。トンネルは歩道はしっかりしているし、中の照明も明るい。島の南側海岸を目指し、下っていく。見下ろすと、狭い棚田の中を路線バスが走っている。下りきったところは恋が浜とある。白砂青松のやや草臥れた風景に見える。ここからは海岸線をひたすら走る。リュックを背負ったランナーと擦れ違う。日帰りランの感じがする。淡々と海岸線を走る。海と、船と、島と、空と、たまに民家の景色だが飽きない。重なり合う島影に鈍色の海。のんびり（そう見える）と走る船。たまに日が差す空。物音しない家。海はいいね。Y女史からメールが来る。安心院ワイナリー祭にいくとのこと。ワインを飲

みたいなのと思いながら返信を打つ。相変わらず、釣り人が多い。

蒲刈大橋が見える。次の島は、下蒲刈島である。どの島も山の頂上までみかんを植えている。12時を回り、腹が減ってきた。橋の手前に道の駅らしきものが見えてきた。串山公園出合いの岬とある。ランモードを解き、店に入る。土産物屋の奥が食堂になっており、蒲刈塩を使ったという手打ちうどんを食べる。走っている時は、塩ッ辛いものは何でも旨い。土産物屋をみると、ここも塩は高い。30分程休み再びランモードに戻る。橋を渡り終え、海岸通りに降りる。橋の下の通りから、石畳になっている風情を感じる町並みが続く。通りにしめ縄が張られている。祭らしい。海の駅に、手作り“じゃこ天”ありと出ている。“じゃこ天”を注文すると、感じのいい若い娘さんが作り始めた。あつあつの“じゃこ天”を頬張りながら、売り子さん（みんな若い）にいろいろ聞いた。明日より、祭ということだ。“じゃこ天”が旨い。ビールを売ってないのが残念だった。道に“清道 朝鮮通信使再現行列”という旗が石畳道に数メートル置きに立てられている。祭とはこのことなのだろう。江戸時代朝鮮通信使をもてなした館があり、観光名所となっている。海岸に隣接している。松濤園という。庭園も素晴らしい。垣が低いので、入場料を払わずに皆外から、屋敷を伺っている。そのそばには、7言絶句、7言律詩の漢詩が彫られた石碑が建っている。漢詩で当時はコミュニケーションをとっていたのだろうか。石畳もさることながら、道の両脇を松などあしらい庭園風に拵えている。和風の美術館もある。大名等が休息をした本陣後もある。参勤交代などで瀬戸内を航行する時に、立ち寄った島なのであろう。往時が偲ばれる。歴史に浸っている間に、時間を費やした。名残惜しいが、再びランモードになる。

遠くに、安芸灘大橋が姿を現した。あの橋を渡ると、本州に着く。と同時にとびしま海道も終わりである。橋への坂道に、石をあしらった芸術品らしきオブジェが建っている。橋は2.5キロほどあり、車は有料になっている。橋を本州に近づくにつけ、旅の終わりをを感じる。渡り終えると、国道185号を呉に向かう。20キロほどある。車の通行量が、島と違い急に増えた。歩道も狭い。気をつけなければと、気持ちを締める。疲労も感じるようになってきた。この辺は呉市仁方町と出ている。峠道にかかる。歩道がなくなる。路肩も殆どなく、歩いて行った。カーブの陰から、スピードを出した車がいきなり現れる恐怖に曝される。怖かった。旅走の唯一の欠点か。峠を抜けてローソンに寄る。アルコール0のフリーを飲む。ビールを飲みたかったが、足がふらついて事故ったら目も当てられない。仁方トンネルを避け、旧道を迂回する。左に昨日乗ったJR呉線が並行している。再び国道に合流した後は、歩道もしっかりしており淡々と走る。しかし、スピードは上がらない。だんだん街の雰囲気が出てきた。都会になった。呉市広とある。街並みを走る。暫く行くと、上り坂で休山トンネルに入る。3キロぐらいあろうか。歩道は広いし、明るい。しかも、歩道と車道が透明なプラスチック板で仕切られている。防音になっている。音もなく車が走っていくのは、不思議な感覚に捕らわれる。こんなトンネルは初めての経験をした。トンネルを抜けると、そこは呉市だった。（聞いたような・・・）戦争中は海軍の町だ

ったそうな。今も大きな街に見える。呉駅が見えてきた。信号待ちをしていると、大通りの青信号を、なんと自転車青年が渡ってくるではないか。向こうも驚いている。「また会ったね」「またお会いしましたね。ここまで走って来られたのですね。凄い。尊敬します。」・・・尊敬されるほどではないけど・・・すっかり、他人とは思えなくなった。別れが惜しくさなくなった。今日は呉に泊まり、明日広島を観光し新幹線で帰るそう。今夜のホテルが決まっていらない。最初、この旅の最後は、呉に泊まろうと考えていたが、ネットで調べた範囲では空きがなかったが・・・息子の如く気になる。あまり長く話していると、情が移りそう。「また何処かで」名残惜しく握手で別れる。振りかえることなく、呉駅を目指す。時刻は4時前だ。広島まで30キロ弱。そこまで行く気力も、足も残っていない。呉駅で終わりにしようと思った。

呉から広島まで電車で移動。汗ばんだ体を気にしながら・・・。期待通りの旅走であった。また一段と旅走、走り旅の楽しさが深まった。また行こう。

